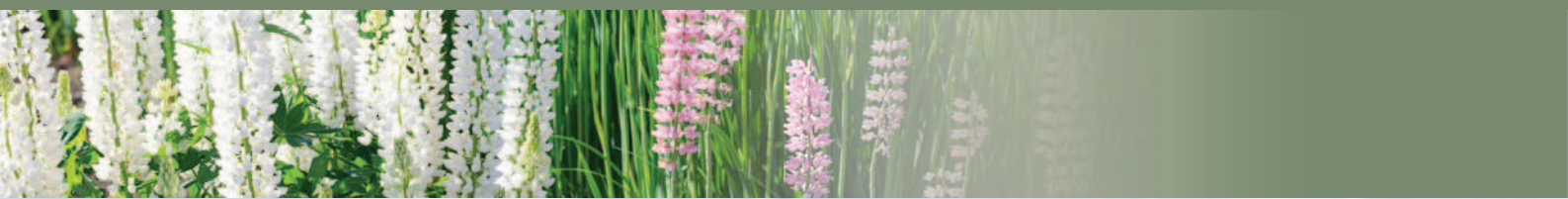


町内会新事情

「町内会」は、戦時下の昭和15年（1940）以降に内務省訓令により、行政の下部組織として位置付けられました。戦後は、昭和27年（1952）の占領終結とともに復活し、現在に至っています。しかし、昨今は少子高齢化やデジタル社会の進展などにより、町内会活動への関心は全国的に薄れつつあります。その一方で、地域の高齢者福祉や、ゴミ出しトラブルなどの環境課題、防災・防犯対策など新たな問題が生まれており、共助の精神で結ばれた町内会の役割は、快適で住みよいまちづくりのために、ますます重要になっています。

ここでは、町内3地区の中から3町内会の沿革と活動状況、そして若い世代による新事情も併せて紹介します。



大黒舞い／えんぶりの祝福芸のひとつで、右手に打出の小槌、左手に扇を持ち、交互に振りながら舞う（剣吉えんぶり組／令和8年2月7日）



玉掛町内会

**馬淵川沿いの河岸段丘上にある
ひとかたまりの純農村地帯**



山裾に立地する玉掛の純農村地帯で、下ると前方に国道4号と馬淵川が走る。前方に見えるのは名久井岳（令和8年4月17日）



えんぶり烏帽子を被った玉掛えんぶり組の太夫たち（令和8年2月7日）



松の舞／囃子に合わせ右手に扇を持った舞い手の少年が、首を曲げるようにおおげさに扇を振って舞う姿が愛らしい（令和8年2月7日）

「玉掛」には玉掛と諏訪ノ平の2つの集落があり、行政区としては別々になっています。諏訪ノ平は駅を中心に町場を形成していますが、玉掛は馬淵川左岸の河岸段丘上に立地したひとかたまりの純農村地帯で、リンゴやブドウ、野菜などの集約農業が盛んです。玉掛の地名由来は、集落の約百メートル東外れの馬淵川が大きく湾曲する水中に、巫女の念珠をまといめぐらしたような「玉掛岩」があったからといわれます。これは湾曲部に大きく張り出した懸崖の礫岩層が崩れ、その中の黒色した玉砂利が水中で玲瓏たる石に見えたとも伝えられています。

玉掛町内会は、現在の中野弘美会長（68歳）が25代目とあって、明治時代の部落会を前身とする歴史があります。また、明治初年の「新撰陸奥国誌」に玉懸村家数58とありますが、現在の町内会は47世帯となっており、さほど人口の増減のない、農業を主とした安定した生活基盤を持つ集落といえるでしょう。

**「えんぶり」に「春祈禱」
神遊びの伝統芸能が
地域をつなぐ**

町内会の中心になってきたのが、村の開発祖神として古来から尊崇を集める玉掛神社です。実際、令和8年（2026）度の行事計画には、1月1日の初詣に始まり、3日は三日祭・えんぶり烏帽子揃い、2月初旬のえんぶり、22日春祈禱、9月1日玉掛神社例大祭、12月下旬合同年越し行事など、氏子活動をベースとしたイベントが多く、そのほかに定期総会や町内会・総代会同役員会、自主防災組織による避難予防訓練、町内清掃、町内会持山の林道草刈り、道普請があります。

また、今は青年部や婦人部、老人クラブはありませんが、子ども会は12、13人ながら毎年節分祭・えんぶり・玉掛神社例大祭の神輿担ぎ・クリスマス会などで活発に活動し、世代間交流の場になっています。

「玉掛えんぶり組」は、南部地方えんぶり保存振興会に所属しており、「八戸えんぶり」として国の重要無形文化財に指定されています。えんぶりは古くは「えぶすり」とも言われ、五穀豊穡を祈願する予祝行事「田遊び」を起源とする神事芸能です。

神事は吉凶占いに学んだ「あてもの遊び」が、遠い昔から主流のひとつだったようですが、ここで言う「田遊び」とは神遊びのことです。



春祈禱／神社総代の中野篤榮さん宅で神楽を舞う（令和8年2月22日）



春祈禱の門付け／若夫婦と子どもたちの前で神楽を披露後、厄祓いで獅子頭に頭を噛んでもらう（令和8年2月22日）



門付けで笛を吹く中野弘美会長（令和8年2月22日）



町内会中堅の中野正弥さん（玉掛神社前で／令和8年2月22日）

体選手になつた変わり種でもあります。

遊びにはそもそも神々の舞踊、鎮魂するという意味があります。

令和8年2月7日の「南部町えんぶり」の日には、染抜き裾模様の大紋直衣に無地の長羽織を着て、えんぶり烏帽子（馬の頭をかたどった田の神の依代）を被った太夫もさることながら、祝福芸の恵比寿舞い・黒舞い・きのこ舞・松の舞を演じた子どもたちの晴れやかな姿が印象的でした。

それから半月後の2月22日、やはり民俗芸能の「春祈禱」が行われました。これは火伏せなど家内安全と、厄年を迎えた人々の厄祓いを行うものです。

芸態は赤い獅子頭姿の太夫と、獅子の幕（垂れ布）を後ろで操るマクトリの2名で舞われる獅子神楽系統の大神楽に属し、囃子は大小2張の太鼓、笛、手びら鉦が拍子を

取ります。

玉掛神社で出立式が行われ舞いを奉納した後、最初に神社総代の中野篤榮さん宅で「前歌」「七の段」から佳境の「狂い獅子」まで披露し、御神酒の振る舞いを受けてから集落内を門付けして歩きました。

皆顔なじみで、助け合いは当たり前

中野会長のほかにもうひとり、総代家8代目でもある中野正弥さん（50歳）に話を伺いました。正弥さんは父親が畑作以外に養鶏をしていたこともあり、農業とは別にブロイラー飼育の経営もしています。42歳頃に銃砲免許を取得し、町の猟友会に所属しています。クレイ射撃協会にも所属し国

玉掛町内会の特色は、小規模集落であるだけに、集落の隅々まで目が行き届き、皆顔なじみで助け合いは当たり前であること、常に情報を共有しているのすぐれに共通認識を得られ、組織分掌も必要ないこと、後継者に関しては、豊かな農業経営で、農地も栽培技術も承継されていくことを期待している、力強い言葉で語ってくれました。



桜本町町内会

町内会の基点「剣吉駅」と活動の概要

桜本町公民館が青い森鉄道剣吉駅の脇にあるように、桜本町町内会の基点は剣吉駅にあります。令和8年（2026）5月31日には町内奉仕作業で、駅に隣接する空き地の草刈り・花壇整備と、駅周辺の町内クリーンアップ作戦に20名ほどの児童と、親たちが参加しました。

木村喜代治会長（72歳）によれば、この数日前や10月にも駅ホームの草刈りがあり、さらに東の住宅地と西の商店街をつなぐ駅跨線橋の「あじさい通路」は、毎週金曜日から朝昼2回、8名で清掃活動をしており、地



町民の足「なんぶちえりバス」の停まる青い森鉄道剣吉駅前。奥に見えるのは平成元年に旧名川町が整備した町道剣吉駅跨線橋（愛称「あじさい通路」）

域の「マイルール意識」はかなり高いようです。

そのほかの活動は、6月と10月の桜町町内会と共同しての国道三叉路・剣吉分水ゲート周辺の奉仕作業、7月の剣吉こども夏フェス協力、8月～9月にかけての名川秋まつり準備と参加、10月の町民運動会参加があります。また、地区巡回型介護予防教室（にこにこクラブ）や自主防災会訓練実施なども。

世帯数は現在193戸で会員数は189名。このうち令和2年（2020）に子育て世代住宅として整備した「チェリータウン桜場」には、38名の会員が住んでいます。その新しい住民に、町内会活動になじんでもらえるかが課題でした。

「剣吉未来プロジェクト」への期待と名川発祥の「南部手踊り」

この地に東北本線（現青い森鉄道）剣吉駅が置かれたのが明治30年（1897）で、駅前通りには商家が増加し、生業を半商半農とする地域でした。その後、剣吉商店街は旧名川町の経済の中心地として発展してきたのですが、近年は人口減少や郊外型量販店の進出などの問題に



木村喜代治会長（令和8年5月31日）

直面し、衰退してきました。

活性化を取り戻そうと、剣吉商店会では平成22年（2010）4月に桜本町・桜町・荒町・上中町の4町内会と合同して「剣吉駅前ストリート活性化委員会」を設立。夏祭りやウォーキングイベント開催、マップ作成などの活動が高く評価され、平成28年（2016）には経済産業省の「はばたく商店街30選」に選ばれるほどでした。

近年はコロナ禍で途絶えていた夏祭りを復活させようと、令和7年（2025）に地元消防団やえんぶり組関係者が中心になり、「剣吉未来プロジェクト」が発足。同年8月16日に開催された剣吉盆踊りには約500人が参加して、伝統的な盆踊りとポッ



町内奉仕作業での花壇整備（令和8年5月31日）

学校行事や町内会での 伝統芸能継承がヒントに

名川中学校や小学校では、地域ぐるみでえんぶりや南部手踊りの伝承活動に取り組んでいます。発表会や秋の名川秋まつりでは子どもの晴れ舞台を見ようと親たちも集まります。この伝統芸能の継承が町内会活動にも大いにヒントになりました。

名川地区は「伝統芸能の宝庫」です。町無形民俗文化財には、えんぶりほか多くの芸能が保存・継承されていますが、出色なのは名川地区が発祥の地とされる「南部手踊り」でしょうか。これには南部甚句・南部あいや節など7つの踊りがあり、7つの民謡を組み合わせた「南部七唄七踊り全国大会」が毎年、9月に開催されています。



名川秋まつりでの手踊りを練習する桜本町山車組の子どもたち（令和7年9月6日）



名川秋まつりの山車を製作する青年部13名の桜本町山車組（令和7年9月6日）



子供会の児童と一緒に町内クリーンアップ作戦に参加した鎌田真由美さんと2人の娘さん（令和8年5月31日）

前述した駅周辺の町内クリーンアップ作戦に参加した20名ほどの児童と親たちは、そのほとんどがチェリータウン桜場の住民です。そのうちのひとり鎌田真由美さんはこの日、2人の娘さんと一緒に駅からチェリータウン桜場までゴミ拾いに協力しました。それは学校行事や子供会で、日頃から友達と一緒に行動することが日常になっているからということでした。

町内会の子供会は現在24名で構成され、年間の事業計画は4月にジャガイモ植え（8月に収穫祭）、5月に町内会合同クリーンアップ作戦、7月にラジオ体操、10月にビーチバレーボール大会・モルック大会、11月にハロウィンパーティー、3月に進級・進学祝いなど。子どもの喜びが親の喜びになり、それが町内会の結びつきになっていきます。



町内クリーンアップ作戦に参加したチェリータウン桜場の住民と木村会長（令和8年5月31日）

杉沢町内会

シンボル「杉中桜」がもたらした地域の絆

杉沢地区のシンボルといえば「杉中桜」があります。樹齢約百年のソメイヨシノで、南部町「達者村百景」の一つに数えられている名木です。令和5年（2023）4月、杉沢中学校は福地中学校に統合され、校地は分譲団地として造成中ですが、桜は杉沢・あけぼの・樺木町内会有志による春のライトアップや、11月末～1月末までのイルミネーションで飾られています（イルミネーションは現在、旧杉沢小学校で実施）。

明治時代以降、地方の自治組織にとって中心拠点となってきたのが小中学校でした。子どもと大人（保護者）がこぞって活動で



杉中桜／後方が分譲中の（仮称）第3あけぼの団地（令和8年4月20日）

きる場だったからです。そのようなコモン（共有）の意識が、財産区としての仕組みを継承し、町内会を運営する原動力となっています。

財産区の仕組みを継承した「コモン（共有）」の伝統

「財産区」とは、旧村単位で共有財産を引き継ぎ、独自に管理していく仕組みで、財産には土地やインフラなどのほか、文化や共同体意識の継承という側面もあります。多くは昭和30年代に実施された「昭和の大合併」をきっかけに生まれました。杉沢地区も、昭和30年（1955）に地引村と合併して福地村になり、財産区運営をしています。

杉沢町内会が正式に誕生したのは、規約の施行が平成11年（1999）3月7日になつていたので27年前でしょうか。坂本久紀会長（66歳）は、3代目会長として就任4



旧杉沢中学校でのイルミネーション点灯（現在は旧杉沢小学校で実施）

年目になりますが、生まれも育ちも杉沢で、文化・体育・環境部長を歴任し、町内会の変遷をつぶさに見てきました。

杉沢小学校に校庭がなかった時代には畑地を整地したグラウンドで、合同の学区民運動会をしたこと、杉沢・あけぼの第1・第2子供会3班、約200人で「泊まらないキャンプ」をしてバーベキューを楽しんだことが忘れられないといいます。また、杉沢青年団の数名が芸能保存会継承師となって子どもたちに杉沢えんぶり・小橋大神楽を指導しています。

令和8年（2026）度の主な活動計画は、3月29日が定期総会、4月19日が杉沢町内道路清掃、25日観桜会、6月・12月杉沢研修館消防訓練、7月～9月杉沢小学校



杉沢町内会の里地風景（令和8年4月17日）



定期総会で挨拶する坂本久紀会長（令和8年3月29日）



定期総会後の懇親会で演じられた小橋大神楽（令和8年3月29日）

さまざまな人材を活用し、 新旧が融和する新しい町内会に

跡地草刈り、8月9日共同墓地周辺草刈り、道路清掃、10月南部町民運動会に向けて練習、25日町民運動会参加、11月イルミネーション点灯式、12月門松づくりとなっています。

町内会活動中、特に南部町民運動会は例年のようにあかねチームとしてのぎを削り、何度も優勝しています。また、旧杉沢小学校ではマラソン練習を毎日のようにしていたように、運動熱心な地域です。

その因果関係は分かりませんが、杉沢は多くの競輪選手を輩出しています。そのうちのひとり、小橋明紀さん（52歳）に話を伺いました。明紀さんが競輪の世界に入った



競輪選手として活躍する小橋明紀さん（令和8年4月1日）



9・10月の町民運動会練習風景

のは、1984年のロサンゼルスオリンピックで銅メダルを獲得した坂本勉選手と、その兄でモスクワオリンピック選手の典男選手（ボイコットで出場せず）への憧れでした。

坂本選手の凱旋パレードを見て、平成3年（1991）の八戸工業高校1年時にはプロ入りを宣言。その後、直近では令和7年（2025）7月1日にS級2班に所属し、同年11月22日のF1レースでS級予選突破と、息が長い活躍をしています。

坂本会長は、今後の町内会活動に向けて

事業のメニューを多様にし、それぞれ班体制に分かれて実施することを考えています。町内に住む、さまざまなキャリアや得意分野を持つ人材を講師にし、会員が興味を持って参加できる講座やワークショップを開くことなど。筋トレやメンタルトレーニングに持

論のある小橋選手もその候補者になりそうです。

また現在、杉沢には中学校跡地に（仮称）第3あけぼの団地を造成し分譲中ですが、そこに町外から移住してくる家族も巻き込み、新旧が融和した新しい杉沢町内会を築くのが夢です。

